

第23回日本基礎理学療法学会学術大会は参加者 1,383 名にて無事に閉幕

第23回 日本基礎理学療法学会学術大会



【目次】

日本基礎理学療法学会代表運営幹事挨拶	1
第23回日本基礎理学療法学会学術大会報告	4
第3回基礎理学療法学 夏の学校報告	6
第24回日本基礎理学療法学会学術大会のお知らせ	7
基礎理学療法学 夏の学校紹介および第4回のお知らせ	9
研究室紹介	11
分科学会・部門トピックスのお知らせ	13

2つの日本基礎理学療法学会 – 基礎理学療法学の歩み –

河上敬介

(公社) 日本理学療法士協会 日本理学療法士学会 日本基礎理学療法学会 代表運営幹事
(一社) 日本基礎理学療法学会 会長

この度  日本基礎理学療法学会 (JPTF) 理事会、総会にて会長を拝命し、基礎理学療法学にとって重要な2つ学会の代表を務めさせていただくことになりました。若い会員の皆さんには、2つの同じ名前の学術組織の存在を不思議に思われる方が多いでしょう。ましてや、この2つの代表を務めるのが同じ人物ですのでどう考えても不自然です。そこで、5年ほど前から統合へ向けて歩みはじめています。とは言え、この2つの組織は、これまで四半世紀の中である意味必然的に起こり、それぞれが基礎理学療法学にとって大切な役割を担って発展してまいりました。そこで、両組織の歴史的背景をご説明するとともに、統合へ向けての経過と今後の展望について述べさせていただきます。

2つの日本基礎理学療法学会とは

日本基礎理学療法学会 (JSPTF) について

公益社団法人日本理学療法士協会 (PT協会) 内に日本理学療法士学会 (12分科学会を取りまとめている組織) とその分科学会としての  JSPTF が産声を上げて6年が経ちます。本学会のルーツは、PT協会内に専門領域研究会が新設され、その中の1部会として「理学療法基礎研究部会」が設置された1997年です。初代部会長藤原孝之先生 (いわき明星大学) のもとで組織された本部会は、2004年から木村貞二先生 (信州大学)、2009年から沖田実先生 (長崎大学) が引き継がれ、基礎理学療学分野の礎を築いてまいりました。2011年から部会長

のバトンをいただいた私は、分科学会組織への移行期という時期にも重なり2014年2月に代表運営幹事を拝命し、現在に至っております。

専門領域研究会は理学療法を7つの領域に分け、その教育と研究の発展のために設置されました。各組織は、その当時PT協会の理事や役員として職能的にも学術的にも牽引されておられた方々を中心に構築されました。PT協会内の組織ですから、「理学療法士全体の資質向上」が重要な役割の1つになります。現在は生涯学習機構の主な役割である教育にも大きな力を注ぎ、基礎理学療法学の位置づけや重要性を広く周知することができました。このことが、12分科学会の1つとして本学会が設置される大きな力となったと考えます。現在の会員数は8,352人 (2019年2月1日現在)、理学療法士全体に対する発信力を持つ組織として成長しつつあります。PT協会内の組織であるため、協会役員との情報交換が行いやすく、国への要望も不可能ではありません。すなわち、学問の追求という学会の本務から生まれた知的財産を、広く社会に普及させるというもう1つの仕事を、PT協会と協力して実施できるという利点があります。例えば、現在日本理学療法士学会に組織されている基本評価検討委員会も  JSPTF の発案です。理学療法士協会版 MMT・ROM テストとして産声を上げつつあります。若干止まってはいますが、理学療法士が超音波画像診断装置を業務に使用するための活動にも積極的に関わってまいりました。すなわち、我々の研究成果を、理学療法士全体の知

識や技術の向上につなげ、そして国民の幸福に役立てるといふ活動が行いやすい位置にあります。

JPTF について

基礎理学療法学のもう 1 つの礎として、1996 年に PT 協会外部の研究会として発足した「理学療法の医学的基礎研究会 (MBPT)」があります。2011 年に発足した  JPTF の前身です。わたくしが最初の世話人代表を拝命し、2001 年から小塚直樹先生 (札幌医科大学)、2005 年から沖田実先生 (長崎大学) と引き継いでいただきながら、こちらも基礎理学療法学の発展に寄与してまいりました。そして、2009 年から世話人代表を引き継いだ金子文成先生 (慶應義塾大学) のご努力により  JPTF に移行しました。昨年末の  JPTF 定款変更にとともに、 JPTF 会長は  JSPTF 代表運営幹事が兼任することになり、再びわたくしが会長を拝命いたしました。

MBPT は、研究者の卵や比較的若い研究者の集まりとして発足しました (わたくしも 30 歳代前半でした)。理学療法学研究を学ぶ大学院がほとんどなかった時代です。組織を牽引していた世話人も含めて会員の多くは、基礎科学や医学系の大学院で研究のトレーニング中でした。よって学術集会では、当時の多くの PT には受け入れていただけないような対象や研究手法を用いた研究が多数存在していました。しかし、他の学際領域の風に触れることにより研究の大切さ、楽しさを味わっていました。当然会員は理学療法士だけではなく、職種や研究領域も多岐に渡り、学問の熱い議論と情報交換の場として始まりました。まるで現在の  JSPTF 主催の「基礎理学療法学夏の学校」のような活気に満ち溢れていました。

 JPTF は発足当初の命名のごとく、理学療法に関わる医学的基礎情報の集約の場として発展してきました。日本学術会議協力学術研究団体として、幅広い学際領域から情報を集め基礎理学療法学を構築する学術組織としての仲間入りもしました。以上のように  JPTF は小回りのききやすい研究者の集団として発展し、学術活動に専念してまい

りました。

2 つの日本基礎理学療法学会の融合と合併へ向けて

以上のように、若干異なるルーツで始まった両学会ですが、この四半世紀で我々の環境も、そして我々研究者自身も変わり、両学会の立ち位置も少しずつ変わってまいりました。

環境で最も大きく変わったのは、理学療法士養成校に占める大学の割合が 40% を超え、理学療法学やその研究を学ぶことのできる大学院の数が大幅に増えたことでしょう。その中から、たくさんの優秀な研究者が生まれはじめています。解剖学、生理学をはじめ他の学際領域の研究や教育を牽引されている方も出てまいりました。一方、MBPT の立ち上げ当時の若者たちも、 JSPTF の中で、理学療法基礎研究部会の立ち上げに携わってこられた諸先輩方々に近い役割を担うようになってまいりました。また  JPTF の多くの会員が  JSPTF に籍を置いています。 JSPTF も分科学会化時点での PT 協会の後押しもあり、学術活動の自立や発展のための法人化へ向けての模索が始まっています。両学会間で協議を重ね、学会の目的や展望も同じであることを確認しました。そうすると、両学会の長所を合わせるだけなので話は簡単ははずです。既に日本学術会議協力学術研究団体である  JPTF の活動を、PT 協会と密な協力体制をとること事のできる  JSPTF の位置で法人化させればいいことです。

そこでその準備として、 JSPTF と  JPTF とは 2014 年から合同で学術大会を開催することにしました。そして、日本理学療法士学会で連合大会が各分科学会の単独開催に移行した 2018 年からは、学術大会の名称を「第 23 回日本基礎理学療法学会学術大会」の 1 つに統一し、新たなスタートを切りました。ちなみに「第 23 回」は、 JPTF の前身 MBPT の第 1 回学術集会 (名古屋) から数えた回数です。同様に、2018 年より  JPTF の会報は、 JSPTF 業務として引き継ぐことにな

りました。一方、学会の活動として重要な学術誌の発行については、PTの包括的な雑誌である日本理学療法士学会の理学療法学と、 JPTFの日本基礎理学療法学雑誌との2本がしばらくの間走ることとなります。

昨年、日本理学療法士学会の中に法人化検討委員会が正式に組織され、その動きの加速が期待されています。理学療法士の地位向上のためには、日本理学療法士協会-日本理学療法士学会-都道府県士会の三位一体となった協力体制は不可欠だと思います。我々学術組織としては、職域に縛られない自由闊達な研究活動の場を保証することも重要で、そこから生まれた成果こそが理学療法や理学療法士にとって価値のある情報として集積され、結果として三位一体の組織への責任ある協力が可能となると信じています。実は、2019年5月で JSPTF代表運営幹事再任規程の任期が満了となり、両代表を退くこととなります。今後はこの二つの日本基礎理学療法学会が相互の長所を担保しながら発展し、学際的に、職能的に、そして社会的に不可欠な情報を発信できる地位を築いていければと考えます。次の2つの代表を担当される方に対して期待を込めて引き継ぎたいと思います。

学会印象記

— 第 23 回日本基礎理学療法学会学術大会に参加して —

長崎大学生命医科学域保健学系

中野治郎

2018 年 12 月 15 日 (土) ~16 日 (日) に京都市の京都テルサで開催された第 23 回日本基礎理学療法学会学術大会に参加しました。学術大会長は京都大学の市橋則明先生です。ご存じのとおり、今年度の学術大会は日本理学療法学会が各分科会に分かれて初めての開催であり、重要な意味があったと思います。私は日本基礎理学療法学会の運営幹事をしているので、本学術大会の企画から開催までの経緯を多少ながら聞いていましたが、なんと言ってもどの程度の参加者が集まるのか想像できないことが不安要素としてあったと思います。結果的には、参加者は予想を遙かに上回る 1,392 名であったと報告されました。これには私自身もとても驚きました。発表演題数が例年より非常に多かったという印象は受けなかったことから考えると、これだけの参加者が集まったのは講演等の企画が充実していたことが要因ではないかと思いました。大会長講演、特別講演が 2 つ、教育講演が 7 つ、シンポジウムが 3 つと、2 日間の学会にしては多すぎるくらいの内容です。それも、学術大会テーマの「身体運動学を極める」をシステムティックに反映しているすばらしい企画だったと思います。さらに、第 29 回京都府理学療法士学会が同日同会場での開催となっており、お互いの参加者はどちらの会場にも自由に入ることができました。また、京都府理学療法士学会の学会テーマは「身体運動学を臨床に活かす」とみごとに本学術大会とリンクし、両学会の参加者は会場内で身体運動学に関する情報を包括的に得ることができたのではないかと思います。会場は第 1 会場から第 3 会場まであり、ポスター会場が 1 つ、サテライト

会場が 1 つ、さらに京都府理学療法士学会の会場が 1 つありました。すべての会場が開催期間中にほぼフル活動となっていたので、プログラムが重なっているためどちらかをあきらめないといけないという先生も多かったでしょう。第 1 日目のプログラムで印象に残ったのは市橋則明大会長の大会長講演でした。骨格筋の作用は関節角度によって異なり、角度によっては伸筋が屈筋にもなるという事実には衝撃を受けました。実は、臨床業務の中で股関節を屈曲していくとどこかでハムス



受付の様子

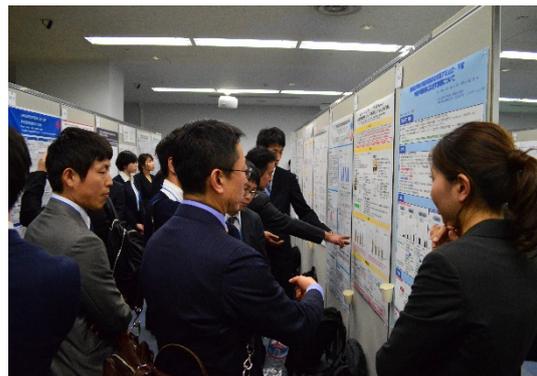


多数の参加者で埋まった第 1 会場

トリングが収縮することをずっと疑問に思っていたのですが、そのモヤモヤが一気に消え去った気がします。無知な私だけだったのかもしれませんが、私の中では基礎研究と臨床が繋がった瞬間でした。それだけでも、今回の学術大会に参加した甲斐があったと思います。午後は、田口徹先生の教育講演の座長を拝命いただきました。病態が曖昧になっている筋・筋膜性疼痛の病態を整理することができ、さらに疑問も湧いて、今後の自分の研究にも繋がる手応えを感じました。ただ、毎回の学術大会で行われるシンポジウム1「若手研究者(U39)による最先端研究紹介」が別会場で行われていて、それを聞けなかったのが心残りです。そのシンポジウムでは、高インパクトファクターの国際雑誌に掲載された若手研究者の研究内容が紹介されていたはずですが、

第2日目は魅力的な講演をあきらめ、演題発表を聞くことにしました。研究の最新知見を得ることも学術大会に参加した大事な目的ですし、共同演者になっている演題もありましたので仕方ありません。ポスター会場は、別会場で講演・口述発表が行われているにもかかわらず移動が難しいほど混雑していました。時間終了後も会場付近で議論が交わされるなど、熱気冷めやらぬ様子でした。

繰り返しになりますが、本学術大会は日本理学療法学会が各分科会に分かれて初めての開催でした。どのような結果になるか、すべての関係者が



発表中のポスター会場

注目していました。結果は企画、参加者数、進行、内容すべての面において大成功。よいスタートが切れたと誰もがおっしゃっています。これは学術大会長の市橋則明先生をはじめ、綿密に準備をされた事務局長の建内宏重先生、その他の運営スタッフ方々のご尽力の賜物です。また、託児所の設置、大学院生向けの旅費補助が行われたことも賞賛すべき心遣いだと思います。本当にご苦労様でした。

次回は新潟です。11月30日(土)～12月1日(日)に朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンターで開催される予定で、大会長は新潟医療福祉大学の大西秀明先生です。きっと今年と同等かそれ以上の盛大な開催になるでしょう。より多くの方が参加されることを期待します。

「第3回 基礎理学療法学 夏の学校」活動報告

石田 和人 (豊橋創造大学)

今年度の「基礎理学療法学 夏の学校」は、高松泰行氏（北海道大学大学院保健科学研究院）が実行委員長を務められ、2018年8月25-26日、愛知県名古屋市（サンプラザシーズンズ）にて、開催されました。

特別講演では、榊間春利先生（鹿児島大学医学部保健学科基礎理学療法学講座）に、『運動と脳神経保護』をテーマに、ご講演頂きました。

また、若手研究者特別講演として、石田章真先生（名古屋市立大学大学院医学研究科脳神経生理学分野）に、『リハビリテーションによる機能代償における皮質-脳幹路のダイナミズム』、また、竹中菜々先生（京都大学 iPS 細胞研究所）に、『デュシェンヌ型筋ジストロフィー症モデルマウスに対する等尺性収縮トレーニングは、細胞移植治療による病態改善効果を促進する』をテーマに、最新の研究知見であり、まさに理学療法の基礎にふさわしい内容をエキサイティングにお話頂き、興味深く拝聴しました。

今回、宿泊を参加の原則としたこともあり、参

加者は81名でしたが、54演題の研究発表があり、2日間を通して、熱く、深い議論を重ねることができました。

この「基礎理学療法学 夏の学校」は、大分で開催されたキックオフミーティングを皮切りに、第1回（新潟）、第2回（長崎）と開催され、今回の名古屋は実質4回目となります。私自身が、この4回の「夏の学校」に参加させて頂き、開催ごとに、“厚い”ホスピタリティーを感じながら、“熱い”議論が飛び交う大変有意義な企画として引き継がれています。いわゆる学術大会とは、趣を異にし、若手研究者が中心となり企画し、十分なディスカッションの場、研究者同士の交流の場などを提供して頂いていると思います。

次回は、鹿児島（第4回 基礎理学療法学 夏の学校、代表：角園 恵（九州看護福祉大学・鹿児島大学）、会期：2019年8月24-25日、会場：ホテル京セラ）での開催となりますが、また、基礎理学療法学研究者の熱い集いになることを期待しております。



第 24 回日本基礎理学療法学会学術大会

第 24 回日本基礎理学療法学会学術大会が 2019 年 11 月 30 日から 12 月 1 日の 2 日間、新潟コンベンションセンター（朱鷺メッセ）にて開催されます。本学術大会の趣旨は、①人体構造・機能・情報学、②身体運動学、③神経生理学（運動制御・運動学習）、④生体評価学、⑤運動生理学の 5 つの研究領域に関連する最新の研究成果についての議論を深め、理学療法学の発展および学術的な基盤形成を通して人々の健康と幸福に貢献することです。また、本学会のテーマを「理学療法によるニューロモデュレーションの可能性」とし、5 つの領域の中でも、特に神経生理学（運動制御・運動学習）に焦点を当てた以下の講演を準備しております。

・ 特別講演

「スマートリハビリテーション（仮）」：里宇明元先生（慶応義塾大学）

・ 教育講演

「リハビリテーションによるニューロモデュレーション（仮）」：美馬達哉先生（立命館大学）

「脳損傷からの機能回復と神経可塑的变化（仮）」：肥後範行先生（産業技術総合研究所）

「皮質内抑制回路の可視化とその応用（仮）」：濱田雅先生（東京大学）

「浸水による神経系機能の変調（仮）」：佐藤大輔先生（新潟医療福祉大学）

「大脳の神経血管連関と酸素輸送ダイナミクス（仮）」：正本和人先生（電気通信大学）

「fMRI を用いたニューロフィードバック（仮）」：柴田和久先生（放射線医学総合研究所）

「脳情報からリハビリテーションを科学する（仮）」：菅田陽怜先生（大分大学）

「慢性疼痛治療に対するチームアプローチ（仮）」：西原真理先生（愛知医科大学）

「工学技術による身体機能の拡張（仮）」：栗田雄一先生（広島大学）

「スポーツと脳（仮）」：荒牧勇先生（中京大学）

また、若手研究者による最先端研究発表（U39）を含む、3 つのシンポジウムと 300 演題以上の一般演題を予定しております。特別講演・教育講演も含め、活発な議論が行われ、理学療法学の発展に寄与できる場になることを期待しています。

本学術大会の演題募集期間は、2019 年 5 月 7 日から 6 月 17 日を予定しております。詳しい学術大会の情報については、学会ホームページ（<http://24jsptf.com>）やメールマガジンにて情報提供を行ってまいります。ホームページは右記の QR コードからもアクセスできますので、ご確認いただければと思います。



QR コード

第54回
日本理学療法学会大会



理学療法による ニューロモデレーションの 可能性

大会長 **大西秀明**
新潟医療福祉大学

会期 **2019年**
11/30日▶**12/1日**

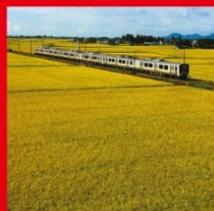
会場 **朱鷺メッセ**
新潟コンベンションセンター
新潟市中央区万代島6番1号

【演題登録期間】2019年5月～6月中旬を予定
※決定次第、ホームページでご案内いたします。

プログラム

- 一般演題…口述発表
ポスター発表
- 大会長基調講演…1題
- 特別講演……………1題
- 教育講演……………10題
- シンポジウム……………3テーマ
- 共催シンポジウム…1テーマ

第24回 日本基礎理学療法学会 学術大会



【準備委員会】新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科内 E-mail: 24jsptf@jspt.ne.jp 準備委員長 椿 淳裕
※本学術大会は、第54回日本理学療法学会大会の1つとして開催されます。

基礎理学療法学 夏の学校

近年、若手研究者を中心とした企画が多くの学会で積極的に行われており、それに伴う研究水準の底上げが多くの分野で進んでいます。日本基礎理学療法学会の若手研究者も、基礎理学療法の研究水準の底上げを図るために、これまでどおりの縦のつながりのみならず横のつながり、すなわち若手研究者同士の相互ネットワークを強化していく必要があります。「基礎理学療法学 夏の学校」は、この若手研究者の相互ネットワークの強化を図るために毎年 8 月に開催される若手研究者の集いです。

2016 年に「基礎理学療法学 夏の学校キックオフミーティング」が大分で行われ、翌年より「基礎理学療法学 夏の学校」として、新潟、長崎、愛知で開催されました。特別講演、若手研究者によるシンポジウム、ポスター発表を兼ねた情報交換会、自由討議等がプログラムに含まれ、心行くまでディスカッションできる場として多くの方に満足して頂くことができました。理学療法士のみならず、工学研究者の参加も増え、新たなネットワークを作る場ともなっています。



キックオフミーティング in 大分



第 1 回 in 新潟



第 2 回 in 長崎



第 3 回 in 愛知

「第 4 回 基礎理学療法学 夏の学校」は、2019 年 8 月 24 日～25 日に鹿児島（代表：九州看護福祉大学・角園 恵）で開催されます。ご参加をお待ちしております。

今後の予定や活動状況については、ホームページ、メールマガジン、Facebook での情報提供を進めてまいります。フォロー、シェア大歓迎です。

facebook



◎ 大学院生旅費補助制度について

基礎理学療法効果についての更なる科学的知見を得るためには、基礎理学療学分野に関わる若手研究者の育成が重要な要素となっています。日本基礎理学療法学会の若手研究推進委員では、若手研究者の開拓・育成を目的として、「大学院生旅費補助制度」を日本基礎理学療法学会の運営幹事会へ提案し、そこでの承認を経て制度化することに成功いたしました。応募資格を有する若手研究者の方はぜひご活用ください。詳細は右記 QR コードを読み取り、ご確認ください。



若手研究推進委員会

菅田 陽怜、縣 信秀、高松 泰行、中村 雅俊、角園 恵、本田 祐一郎、福本 悠樹

第 4 回 基礎理学療法学 夏の学校

今回は臨床の場で活躍されている先生方にも参加していただきやすいようにと第 2 部を設け、臨床から基礎へ、基礎から臨床へのネットワークになるべく企画しております。

宿泊を伴うことを前提とした合宿形式で行われる「夏の学校」は、時間を気にせず深い討論ができる場です。ご家族連れでお越ししやすいようにと別途プランも準備しております。ご家族と一緒にぜひ鹿児島へお越しください。

会期：2019 年 8 月 24 日（土）～25 日（日）

会場：ホテル京セラ

参加登録期間 **2019 年 4 月 1 日（月）～5 月 31 日（金）**

第 1 部

特別講演：鈴木 俊明 先生（関西医療大学）

第 2 部

特別企画講演：牧迫 飛雄馬 先生（鹿児島大学）

若手研究者特別講演：村松 憲 先生（杏林大学）

生友 聖子 先生（東京医療学院大学）

長谷場 純仁 先生（鹿児島大学病院）



第 4 回 基礎理学療法学 夏の学校代表：角園 恵（九州看護福祉大学）

研究室紹介

「少しぐらいの夢をみて」

広島大学大学院医系科学研究科運動器機能医科学

浦川 将

広島大学の浦川です。3 年前に広島大学に着任しましたが、それまで医学科の研究室に所属しており理学療法関連の学会に参加する頻度も多くなかったため、ほとんどの先生に認知されていないかと存じます。自己紹介がてら、研究室紹介させていただきます。

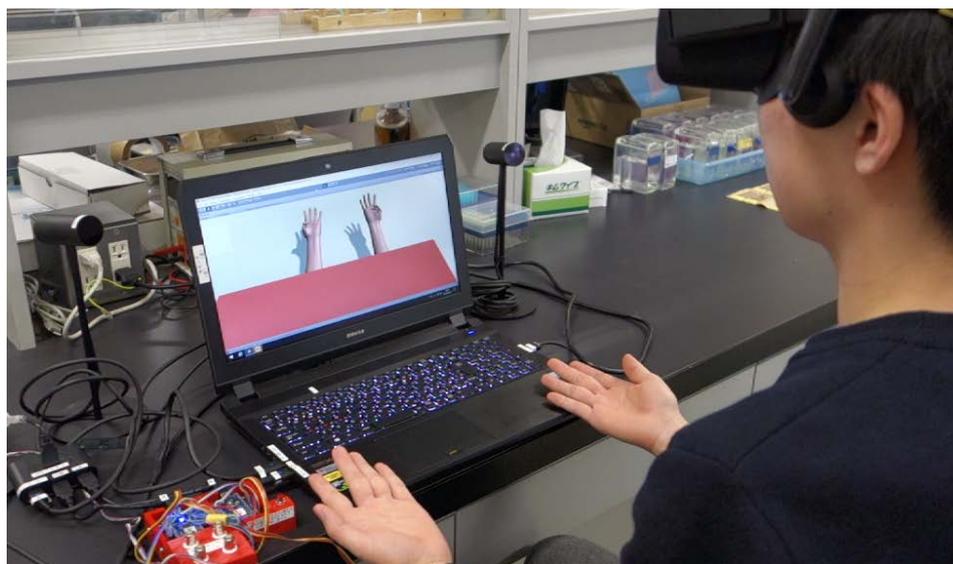
私は、2000 年に名古屋大学医療技術短期大学部の最後の学生として卒業し、その前後に本会の前身である理学療法の医学的基礎研究会に何度か参加したことがあります。まだ理学療法学科の大学院が出来ようとしていた時代であり、その中で理学療法の基礎をこころざす貴重な研究者の集まりであった記憶があります。その後、医学系大学院へ進学し、理学療法の分野とは、付かず離れずといった距離感でした。かといって、やはり自分のバックグラウンドは理学療法士だという自覚があり、神経の軸索誘導（修士課程）、豊かな環境飼育による神経新生の促進（博士課程）、社会性と内分泌系のかかわり（ポスドク）、情動とリハビリテーション（助教～准教授）など、身分と研究室は変わってもリハビリテーション分野との接点を模索しながら研究を続けてきました。恥ずかしながら、常勤として大学にポストを得てから理学療法士協会に入会し新人教育プログラムを開始しましたので、講習会受講の際にはたいい会場内で最年長でした。縁あって広島大学の理学療法学専攻に着任し研究室をもつようになり、2 年前から日本基礎理学療法学会の運営幹事も務めさせていただいておりますが、学生の頃に教えていただいた河上先生、石田先生が基礎理学療法領域を牽引する先

生として活躍しておられ、またかつての同世代理学療法士も臨床での要職や大学教員として活躍しているのを目の当たりにすると、遠回りして戻ってきた分、浦島太郎のような気分にもなります。これ以上理学療法の世界でとり残されないよう、諸先生方に種々ご指導いただきながら精進しております。とはいえ一旦理学療法の世界を離れた時期は、我々の領域を客観的に捉える良い機会ともなりました。他領域の研究者は、リハビリテーションに関する研究をどのように見ているのか、理学療法士として研究をする利点はどこにあるのか、実感として感じながら研究をすすめてきました。私が卒業してからの約 20 年で、理学療法士の取り巻く研究環境も激変したと感じます。振り返ると、先輩理学療法士の先生方が、懸命に国立大学の 4 年生学科設立と大学院の設置にご尽力いただいたお陰で、近年急速に理学療法士がかかわる研究内容も充実してきていると思います。バトンを引き継ぐべき我々の世代が何を成すべきなのか、特に国立大学に籍を置くものは我々の業界を導くべき高い理念・理想を掲げて方針をたてるべき立場にあるのかもしれない。どうぞご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

さて、私どもの研究室では、人を対象とする医学系研究と、げっ歯類を用いた動物実験の両面からリハビリテーション領域の研究を進めています。教室は、講師の藤田直人先生と二人体制で、チームでいうと私が監督、藤田先生がコーチ・指導者といったところです。研究内容は、藤田先生が糖尿病疾患モデルラットによる代謝、骨格筋損傷、

物理療法など介入時における生体反応を中心に研究を進めています。私は、脳の可塑性の観点から、生体への介入時に脳がどのような反応を示すかに興味をもって研究しています。特に「情動」は、リハビリテーションと密接にかかわることが以前から指摘されていますが、まだまだ科学的立証には不十分な領域です。そもそも、ただでさえ複雑な「リハビリテーション」の問題を、複雑系の「こころの動き」によって解明することは、無謀な試みなのかもしれません。うちに2歳の女の子がおりますが、最近ようやくボタンのついたパジャマをひとりで着られるようになりました。私が親切心からボタンを手伝うと、怒り狂ってもう一度外して自分でボタンをはめ直します（出来た後は笑顔で）。そのほか、パズルでもジャングルジムでも難

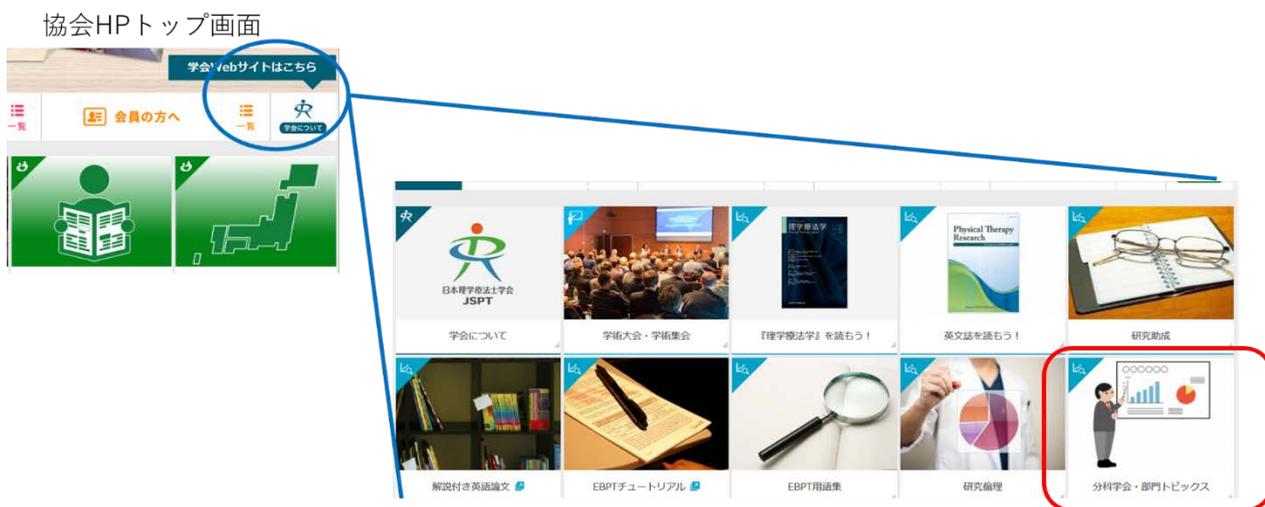
しいことにあえて挑戦して、出来たときの喜びを発散させる機会をよく目にします。情動の発動が豊かな幼少期の彼女をみていると、人間は本来、困難なことに打ち勝つ喜びを見出すことに長けているのではと思ってしまいます。歩きはじめの頃は、どうみても危なっかしいヨチヨチ歩きを何度転んでも笑いながら続けていました。歩行困難な患者さんを指導するとき、本来であれば出来なかったことが出来たことに自ら感動する余地があるように思います。そのような正の情動（positive emotion）をリハビリテーションに持ち込めたら、人間本来の回復力を高めることが出来るのではないでしょうか。そんなことを研究で解明することを夢みながら、地道な研究をすすめています。



バーチャルリアリティシステムを用いたアバターの腕を動かす研究（岐阜大学工学部の松下光次郎先生との共同研究）。動作主体感と脳活動とのかかわりを解明しようとしています。

日本理学療法士学会学術広報委員会による新企画「分科学会・部門トピックス」について

日本理学療法士学会学術広報委員会によって 2018 年に立ち上げられた新企画であります。分科学会や部門に細分化されたことにより、全体を見渡す機会が少なくなっている可能性があるため、分科学会および部門各領域の特徴や活動状況を集約的に概観できる情報提供の場を設立することが目的となっております。今年度は 2018 年 8 月 20 日に「日本予防理学療法学会」および「産業理学療法部門」から開始され、2019 年 6 月の「日本運動器理学療法学会」および「日本スポーツ理学療法学会」までの 22 領域が掲載予定となっております。本学会は「栄養・嚥下理学療法部門」と同時に 3 月末に公開となっております。日本理学療法士協会ホームページの「学会 web サイトはこちら (学会について)」「分科学会・部門トピックス」にあります (URL : <http://jspt.japanpt.or.jp/topics/>)



日本基礎理学療法学会の「分科学会・部門トピックス」の内容は、代表運営幹事のご挨拶、日本基礎理学療法学会のご紹介、当学会の 5 つの研究領域が紹介されております。また、2018 年 12 月 15 日と 16 日に京都テルサで開催されました第 23 回日本基礎理学療法学会学術大会 (テーマ：身体運動学を極める・学術大会長：市橋則明先生) において、学会長賞、大会長賞、奨励賞を受賞された 4 つの演題を紹介しております。是非、ご覧いただき、2019 年 11 月 30 日・12 月 1 日に新潟で開催されます第 24 回日本基礎理学療法学会学術大会へご参加いただければ幸いです。

【JSPTF 日本基礎理学療法学会 News 2018 年度 第 1 号】

2019 年 3 月 発行

発行人：日本基礎理学療法学会 代表運営幹事 河上 敬介

発行所：JSPTF 日本基礎理学療法学会

編集者：金子文成・野嶋一平・浦川 将・石田和人・中野治郎・中江秀幸

E-mail：jsptf@japanpt.or.jp